

- 本県の白ねぎ栽培は産地リレーによる周年出荷を実施しているが、夏越しねぎの生産が不安定であり、**夏秋期の出荷量増加が課題**。
- このため、生産安定が期待出来る**光反射性マルチの畦間被覆**および**スーパー大苗定植技術**の現地導入に向けて、県振興局、県試験研究機関と連携して現地適応性試験や研修会を実施。
- その結果、光反射性マルチの現地試験圃では**最大81%の増収効果**が、スーパー大苗技術では**除草効果の低減**や**太物率の向上による増収効果**が確認出来、現在、技術の現地普及拡大を図っている。

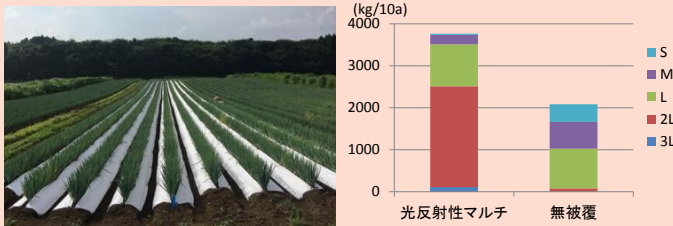
具体的な成果

1 単収および収益性の向上

■ 光反射性マルチの畦間被覆により夏期の生育が安定し、**単収および収益性が大幅に向上**。

① 単収、売上

2,083kg/10a → 3,765kg/10a
625千円/10a → 1,130千円/10a



2 除草作業の効率化

■ スーパー大苗定植により、除草時間が慣行に比べて1/3に低減でき**大幅な省力化を達成**。

○ 除草時間

63.2時間/10a → 18.6時間/10a

3 除草作業の効率化

■ スーパー大苗定植により生育期間が短縮されるとともに、**太物率の向上により増収**した。



スーパー大苗区

慣行区

普及指導員の活動

平成29年

■ 新技術の現地適応性を検討するため、光反射性マルチ畦間被覆およびスーパー大苗定植技術の**現地実証圃を県下各地に展開**。

- ・光反射性マルチ: 3地区7カ所
- ・スーパー大苗 : 2地区4カ所

■ 広域普及指導員(革新支援専門員)を中心として現地普及指導員、県研究機関研究員で構成された**プロジェクトチームメンバーで現地検討会を開催**し、現地普及に向けた課題の整理とその解決策を検討。

■ **実需者を交えた現地研修会を開催**し、産地での生産安定化に向けた取り組みをアピール。



普及指導員だからできたこと

・現地の栽培状況を熟知し、専門知識を持つ普及指導員だからこそ、生産者に**地域の栽培環境を考慮した新技術の提案および栽培指導が出来た**。

・広域普及指導員を中心としたプロジェクトチームで関係機関と連携して活動することで、取り組みが県全体に拡大した。

大分県

夏越しねぎ生産安定技術の普及と生産拡大

活動期間：平成28～32年度

1. 取組の背景

本県の白ねぎは、豊後高田市の干拓地から玖珠九重地域の高標高地まで栽培され、県下の産地をリレーした周年出荷が行われるなど大分県を代表する園芸品目となっている。しかしながら、近年の夏期高温傾向により夏を越える作型（夏越しねぎ）の生産が不安定となっており、その生産安定が大きな課題である。

そこで、夏越しねぎの生産安定が期待出来る新技術「光反射性マルチの畦間被覆」と「スーパー大苗定植技術」の現地普及を、広域普及指導員（革新支援専門員）を中心とした白ねぎプロジェクトチームで取り組んだ。

2. 活動内容（詳細）

1) 実証圃の展開

新技術の現地適応性を検討するため、県下各地に実証圃を設置。現地普及指導員が中心となって、実証圃の設置と生産者指導を実施した。
(平成28年度)

- ・光反射性マルチ畦間被覆実証圃：県下4地区6カ所設置



豊後高田市



九重町



豊後大野市



玖珠町

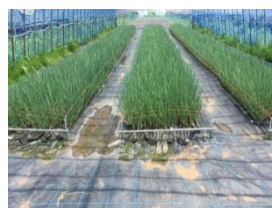
- ・スーパー大苗定植技術実証圃：県下3地区4カ所



九重町



豊後高田市



豊後大野市

(平成29年度)

- ・光反射性マルチ畦間被覆実証圃：県3地区7カ所設置



玖珠町

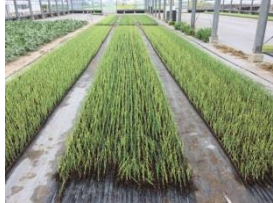


九重町



大野町

- ・スーパー大苗定植技術実証圃：県下2地区4カ所



豊後高田市



九重町

2) プロジェクトチームメンバーによる現地検討会の実施

広域普及指導員を中心とした現地普及指導員、県試験研究機関研究員で構成されたプロジェクトチームメンバーで、技術の現地適応性等について確認するとともに、現地普及に向けた課題の整理と技術の改善を検討した。



3) 実需者を交えた現地研修会の開催

新技術の研修を現地で実施した。実需者である出荷団体の担当者も招き、夏秋期の出荷安定について意見交換を実施し、大分白ねぎのブランド力向上に向けた意識の醸成を行った。



【活用した普及事業の関連予算】

- ・産地ブランド発掘事業・「畝間マルチ被覆による生産安定技術」
(平成27,28年度)
- ・「スーパー大苗定植による夏越し作型安定化技術」
(平成29,30年度)

普及指導員の活動旅費について事業を活用

3. 具体的な成果（詳細）

1) 単収および収益性の向上

タイベックシートを畦間被覆することで、地温の抑制効果等により夏期の生産が安定化し、単収が慣行無被覆栽培に比べて最大 81%増収し、それに伴って売上が大幅に向上した。

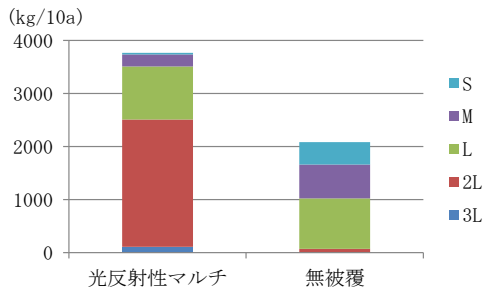


図 九重町実証圃収穫調査結果

表 九重町実証圃収穫結果

試験区	商品収量 (kg/10a)	売上 (円/10a)
タイベック	3,765	1,129,500
無被覆	2,083	624,750

2) ネギアザミウマ被害の低減

光反射性マルチを畦間に被覆することにより、光の乱反射によるネギアザミウマの行動抑制効果が得られ虫害が無被覆に比べて減少した。このことから、農薬散布回数の低減が期待出来た。

・ 無被覆区



(ネギアザミウマ被害度 31.3)

・ 被覆区



(ネギアザミウマ被害度 19.4)

3) 除草作業の効率化

中山間地大規模経営体では、梅雨時期を中心に圃場の除草作業が集中し雑草管理が後手に回るケースが見られるが、大苗を定植することにより生育初期から管理機による中耕除草作業が行えるため管理作業が効率化され、慣行幼苗定植に比べて除草時間が約 1/3 に低減した。

・ 除草作業時間 63.2 時間/10a → 18.6 時間/10a

4) 栽培期間の短縮と増収

大苗を定植することにより栽培期間が短縮されるとともに、太物率の向上により増収した。

・ 慣行区 3,271kg/10a → スーパー大苗区 4,805kg/10a



スーパー大苗試験区



慣行区

4. 農家等からの評価・コメント

タイベックシートを夏場に畦間被覆することにより、生育が良くなり収量が大幅にアップしました。シートを被覆することで雑草も抑えられ管理が楽でした。来年以降も継続して取り組みます。（A社 社長）

5. 普及指導員のコメント

プロジェクトチームで取り組んだことにより、研究員や広域普及指導員に適時現地でアドバイスがもらえたので、自信を持って生産者に指導が出来ました。（西部振興局生産流通部 技師 金丸幸代）

6. 現状・今後の展開等

タイベックシートの畦間被覆については、現地において技術の有効性が確認出来たので、資材メーカー等と連携して技術の普及拡大を図っているところ。スーパー大苗定植技術については、大苗の生産技術確立と省力化および増収効果の確認は出来たが、大苗生産時に専用機器が必要である等技術の普及先が限られることから、より簡易に大苗を生産出来る方法を現地試験を展開しながら検討中。

その他に、平成28年度は7、8月の高温乾燥とそれに続く9月の長雨により白絹病等夏期病害が多発し、夏越し作型の生産が不安定であったことから、夏期病害の体系的防除の実施を指導強化している。